

⑩ 日本国特許庁 (JP)

⑪ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報 (A)

昭57-29359

⑬ Int. Cl.³
A 61 L 15/03

識別記号

庁内整理番号
6675-4C

⑭ 公開 昭和57年(1982)2月17日

発明の数 2
審査請求 有

(全 9 頁)

⑮ 繊維性コラーゲン質止血-接着性生地

一州08512クランバリー・ボツ
クス176ビー・アールデイ2

⑯ 特 願 昭56-87022

⑰ 出 願 人 アビコン・インコーポレーテツ
ド

⑱ 出 願 昭56(1981)6月8日

優先権主張 ⑲ 1980年6月12日 ⑳ 米国(US)
㉑ 158734

アメリカ合衆国テキサス州7610
1フオート・ワース・サウス・
フリーウェイ6201

㉒ 発 明 者 フレッド・アルバート・セラバ
ロー
アメリカ合衆国ニュージャージ

㉓ 代 理 人 弁理士 川瀬良治 外1名

明細書の浄書(内容に変更なし)

明 細 書

1 [発 明 の 名 称]

繊維性コラーゲン質止血-接着性生地

2 [特 許 請 求 の 範 囲]

1. 本質的にコラーゲン又は理論化学量の約50乃至約90%のイオン化性酸を含むコラーゲンのイオン化性水-不溶性部分塩より成る止血-接着性繊維0.5乃至3.5重量%を水性液体中に含むスラリを製造し、上記スラリの予め定めた量を凍結乾燥機トレイに入れかつスラリを凍結乾燥する工程より成ることを特徴とする上記繊維からの切れた生物学的表面に当てるためのベルベット様、止血-接着性繊維性不織生地 of 製法。

2. 水性液体が水である特許請求の範囲第1項に記載の方法。

3. 水性液体が水でありかつスラリが0.5乃至2.5重量%

の繊維を含む特許請求の範囲第1項に記載の方法。

4. 繊維が本質的にコラーゲンより成る特許請求の範囲第1項に記載の方法。

5. 繊維が理論化学量の60乃至85%のイオン化性酸を含むコラーゲンのイオン化性水-不溶性部分塩より本質的に成る特許請求の範囲第1項に記載の方法。

6. 繊維がコラーゲンのイオン化性水-不溶性部分塩化水素塩より本質的に成る特許請求の範囲第5項に記載の方法。

7. 水性液体が水とエタノールの混合液である特許請求の範囲第1項に記載の方法。

8. スラリを-40℃の温度で凍結させ凍結したスラリを50ミクロンの圧力のもとで38乃至40℃の温度で乾燥する特許請求の範囲第1項に記載の方法。

9. コラーゲン又は理論化学量の50乃至90%の量のイオン化性酸を含むコラーゲンのイオン化性水-不溶性部分

塩の繊維より本質的に成りかつ2乃至10mmの厚さ、25乃至250g/m²の基準重量および巾12.7mm当り20乃至900gの引張り強さをもつ繊維性ペルベント様多孔性不織生地であることを特徴とする切れた生物学的表面に当てるための止血-接着性包帯。

10. 生地が30乃至約85の強靱係数をもつ特許請求の範囲第9項に記載の止血-接着性包帯。

11. 生地が本質的にコラーゲン繊維より成りかつ生地が生地グラム当り水5乃至10gの保水能力をもつ特許請求の範囲第9項に記載の止血-接着性包帯。

12. 生地が本質的にコラーゲンのイオン化性水-不溶性部分塩の繊維より成りかつ生地が生地グラム当り水20乃至30グラムの保水能力をもつ特許請求の範囲第9項に記載の止血-接着性包帯。

13. 生地が本質的にコラーゲン又は理論化学量の60乃至

着性包帯。

5〔発明の詳細な説明〕

本発明は自然のコラーゲンからつくつた本質的に微細繊維より成る医療および外科目的に特に適した不織シート又は生地に関する。

種々の処理されまた製造された形のコラーゲンは医療および外科操作にまた外傷の治療に便利であることは従来から知られている。ある形のコラーゲンは外傷包帯として使われた場合止血性をもちまた抗原性が小さい。オルランドA、パツテイス、マメルトM、クルツ、Jr.、およびメリットR、ヘイトの1973年7月5日公告米国特許第3742955号は自然の又は天然のコラーゲンからつくつた血液で湿ると止血性および切れた生物学的表面を接合するに十分な独特の接着性をもつ微細繊維の綿毛の様な物体に記載している。

特開57-29359(2)

85%のイオン化性酸を含むコラーゲンのイオン化性水-

不溶性部分塩の繊維より成りかつ生地が25乃至7mmの厚さ、80乃至200g/m²の基準重量、巾12.7mm当り30乃至450gの引張り強さ、および35乃至75の強靱係数をもちまた生地の孔の75%が約10乃至11ミクロンを超えない直径をもちまたすべての孔が15ミクロンを超えない直径をもつ特許請求の範囲第9項に記載の止血-接着性包帯。

14. 生地が本質的にコラーゲン繊維より成りかつ生地グラム当り水5乃至10gの保水能力をもつ特許請求の範囲第13項に記載の止血-接着性包帯。

15. 生地が理論化学量の60乃至85%の塩化水素を含むコラーゲンのイオン化性水-不溶性部分塩化水素塩の繊維より本質的に成りかつ生地グラム当り水20乃至30gの保水能力をもつ特許請求の範囲第13項に記載の止血-接

上記特許に記載のとおり止血-接着性物質は微細繊維の綿毛の様な物体である。繊維状物体は立方フート当り約8ポンド以下(0.128g/cm³以下)、好ましくは1.5乃至6.0ポンド、(0.024乃至0.096g/cm³)のかさ密度をもつ。綿毛状物体は傷口で血液とまざると表面組織に付着し縫合せる必要なく傷口をふさぐ物体となる。繊維はコラーゲン又はイオン化性酸を理論化学量の約50乃至約90%含むコラーゲンのイオン化性水-不溶性部分塩より本質的に成るコラーゲンの部分塩より成るものでよい。本発明に使用する微細繊維の綿毛状物体は上記特許に記載のとおり製造できる。

綿毛状繊維物体は止血-接着性物体として非常に有効であるが、製品のかさばつた組織のない性質は取扱い上また製品を傷口にあてる上から欠点である。製品の低密度、無組織および綿毛状性質のため繊維物体を傷口に鉗子を使つ

て又はゴム手袋をはめた手で運ぶ必要がある。この取扱いは繊維は取扱量からはなれた繊維物体の一部は鞋子又はゴム手袋に付着する。

これらの繊維は製紙技術に使われる普通の方法でシートに変えることができる。しかしコラーゲンからつくった繊維は水に敏感なため、これら繊維から生成した水でひろげたシート又は生地は粗く板状で羊皮紙状構造となる。この羊皮紙状シートは傷表面にたやすく適合しないばかりか最も重宝なことは止血・接着性が完全に失なわれる。

マメルト M. クルツ、Jr.、オーランド A. バツタイスタ、ラバーン C.、トレツサーおよびカーミンシロラの 1974 年 5 月 14 日公告米国特許第 3,810,473 号は止血・接着性繊維の綿毛状物体を繊維の止血性と接着性を保つたままの液体でひろげた生地に転換する方法を公表している。止血・接着性繊維を容量で有機液体 95 多と水 5

を同特許第 3,742,955 号における様に少量の炭塩酸を含む 100 多エタノール中にスラリー化し、沈澱させてシート又は生地とし一定圧力で圧縮した後凍結乾燥してシート又は生地とする。スラリー化液体中に含まれる僅かの水は塩酸添加によつてもたらされたもの、大気中から吸収したであろうものおよび繊維に含まれている水である。この加えられた水量は約 1.03 乃至約 5 多である。

スラリー化液にエタノール使用を要する。これらの方法は 6×6(1225×1225cm)の最終仕上りシートを製造するにエタノール約 3t を要し主としてこのエタノール経費のためこの方法は不便である。また大量の 100 多エタノールの開放処理は危険な環境を生ずる。

医療および外科用の生地製造に有機液体としてのエタノールについて述べたが、他の目的にエタノールはアルコール類、ケトン類等、例えばメタノール、イソプロパノール、

多から有機液体約 85 多と水 15 多までの組成をもつ混合液より成る液体にスラリー化して粗い羊皮紙状構造生成を防ぐ。有機液体がエタノールである時は混合液は重量でエタノール 93.73 多と水 6.27 多からエタノール約 81.69 多と水 18.31 多を含む。エタノール 95 重量多以上 100 重量多までの液体でスラリー化すると製品は止血効米、傷口への付着性およびデラミネーションにおける“生体”での成績は良好であるが取扱いは不十分である。粘着力が非常にわるいのでシートはもうく切れ易くまた非常に碎け易いので通常の運搬、取扱いに耐えない。

マメルト M. クルツ、Jr.、ジョン H. テナリー、およびラバーン C.、トレツサーの 1977 年 4 月 12 日許可米国特許第 4,016,877 号は同特許第 3,810,473 号の生地の欠点を改良した液体でひろげた不織繊維の製法を公表している。同特許第 4,016,877 号に発表のとおり繊維

アミルアルコール、メチルエチルケトン、アセトンおよびこれら有機溶剤混合液の様な低分子量水混和性の他の有機溶媒で代替できる。エタノール以外の有機液体使用も可能である。しかし製品が外科用途を目的とする場合製品がこれら他の溶媒を全然含まないことが重要である。更に大量のこれら他の溶媒の開放処理もまた危険な環境を生ずる。

チャールスアータンディの 1964 年 11 月 17 日許可米国特許第 3,157,524 号はコラーゲンスポンジの製法を公表している。この方法によれば溶媒とコラーゲン小繊維の酸分散液を凍結する。次いで炭水酸化アンモニウムを含むイソプロパノールの様な水混和性有機溶媒より成る浴槽中に凍結構造物を浸漬する。1965 年 2 月の *Annals of Surgery* 161 巻 238-247 ページの エール E. ビーコック、ヒリアード F. セイグラールおよびポール W. ビッガースの“肝臓傷害治療におけるかつこ

コラーゲンスポンジ使用*と題する文献に示されているとおりこのコラーゲンスポンジは接着性をもたない。使用する際スポンジが傷口と機械的に接触を保つことが大事である。

オーランド A. パツタイスタの1972年1月4日許可米国特許第3,632,361号には同特許第3,742,955号に発表された形のコラーゲンのイオン化性水不溶性部分塩類からスポンジ状物体の製法が発表されている。この方法によればコラーゲンの部分塩より成る繊維を水中ですつて安定分散液とするのである。次いでこの安定分散液を凍結乾燥してスポンジ状物体とする。このスポンジ状物体は実質的に繊維はなくフィルム状層より成る。製品は部分塩繊維の止血性と接着性の両方を共に欠いている。

本発明は自然又は天然のコラーゲンからつくつた微細繊維の綿毛状物体の止血・接着性を保持する繊維性不織マツ

繊維性コラーゲン物質は自然状態の加工しないあらゆるコラーゲン又は例えば生皮、腸、腱又は他の高濃縮性コラーゲン原料の様な脱灰した食用形コラーゲンから製造できる。コラーゲンのよい原料は牛生皮、生豚皮、生羊皮および皮製造に便利に使われる皮類がある。好ましい原料は生牛皮からとつた食用真皮である。

繊維の製造は真皮の様な湿状態のコラーゲン原料をアーシユミルの様な切断機で約0.25乃至約0.5インチ(6-12.7mm)大の小片又は小塊に切断する。別に小片を碎水と混合するなどして繊維化し混合物を上記小片生成に使用したものより小さい寸法に切断できるアーシユミルにとかしてもよい。コラーゲン原料を繊維の綿毛状物体に加工するには繊維の膨潤又は水和を調節することが重要である。繊維の膨潤又は水和が甚しいと水素結合のより多くの位置が生成されて乾燥の際甚しい角質化又は高密度化がおこる。

ト又は生地を製造するものである。

本発明の方法は揮発性有機溶媒のスラリー化液体使用による欠点を解決する。

本発明はコラーゲンからつくつた微細繊維の綿毛状物体のもつ止血性と接着性を保持する繊維性不織マツト又は生地を提供する。

本発明はまた柔軟性で薄片とならずまた繊維に分離せず使用中通常取扱いおよび輸送に耐えるに十分な粘着性をもつ繊維性不織マツト又は生地を提供するものである。

本発明の他の目的および利点は下記方法並びに製品の記述で明白となるであろう。

本発明はコラーゲンからつくつた繊維を水にスラリー化しその一定量を鍋又はトレイに入れてスラリーを凍結乾燥して生成した微細繊維の綿毛状物体のもつ止血性と独特な粘着性を保持する不織シート又は生地を提供するものである。

この角質化は乾燥した材料を止血性と粘着性を与えるに必要な低かさ密度と綿毛性を生ずるに要する機械的細断又は繊維化に対して極めて抵抗性あるものにする。

したがってコラーゲン原料は大部分が低分子量アルコール、好ましくはエタノールの様な水混和性有機溶媒で残余が水より成る液体媒質中で処理される。例えばコラーゲン小塊は先づエタノール70%と湿塊中に含まれる水を併せて水30%(重量で)より成る液中にスラリーとされる。小塊と液中のエタノール量が均衡するに十分な時間混合した後小塊を液から分離し、それを更にエタノールの様な有機溶媒のより高い割合をもつ水液中にスラリー化する。つづく各スラリー化操作において有機溶媒の割合を次第に増して数回のスラリー化操作後コラーゲン含水量が約1乃至2%に低下する様にする。遠心分離などによつてコラーゲンを液から分離し乾燥する。乾燥はオープン乾燥でもよいが、例え

ば60℃、29インチ(710mmHg)真空(94.7KPa絶体)で約16時間真空乾燥することが好ましい。一般にこの真空乾燥により揮発分は約1%となる。

コラーゲンのイオン化性水-不溶性部分塩を生成したい場合のイオン化性酸の必要量はスラリー化水液に添加できる。酸は第2回スラリー化工程で混合するとよい。液に加える酸量は理論的化學量的結合量の約50乃至90%、好ましくは60乃至85%の結合量と部分酸塩を生成する様な量である。コラーゲンを酸含有液と部分塩生成に十分な時間スラリー化した後コラーゲン物質を液から分離し上記のとおりスラリー化操作をつづける。塩酸はコラーゲンの部分塩製造に好ましい酸である。他のイオン化性無機および有機酸類、例えば硫酸、臭化水素酸、りん酸、シアノ酢酸、酢酸、くえん酸および乳酸も適当である。

乾燥したコラーゲン物質は集合を解く処理によつて微細

H_g)で約6時間真空乾燥した後、圧力を約33KPa(25mmHg)に下げて約6時間乾燥をつづけた。次いで乾燥塊の含水量を約10%に増加する様約22℃、相対湿度50%の清浄室内に約16時間保った。条件処理した塊を目揃き0.062×0.5インチ(1.6m×12.7mm)をもちふるいの両側に対し30°の角度のスロットをもつ特殊スロットふるいをもつ5000rpmのフィッツミル(DA50-6-565型)にたおして塊を繊維化した。繊維化した物体を次にフィッツミルにたおして微細繊維の綿毛状物体とした。

繊維を蒸留水および蒸留水とエタノールの混合液より成るスラリー化2液に加え全体をしづかに攪拌して繊維を液にスラリーとして生成物をつくつた。スラリーは約0.5乃至約4.0%(乾燥基準)の繊維を含んでいた。各スラリーをポリエチレンフィルムで内張りした凍結乾燥トレイに移した。

繊維の綿毛状物体に変えられる。この処理の前に物質を水および(又は)有機溶媒の様な揮発分を約8乃至15%含む様処理するとよい。これは通常大気温と湿度(21乃至24℃、40乃至60%相対湿度)の大気中に乾燥コラーゲン物質を約8乃至24時間おけばできる。必要なかさ密度と表面積をもつ様繊維化することはハンマーミル形混合機、例えばフリッツミルの様な装置によつてできる。

本発明による製品製造には微細コラーゲン繊維の綿毛状物体を凍つた又は新鮮な牛真皮からつくつた。真皮を高速切断機(アーシュミル)で小塊に切断した。小塊の一部をエタノールを使つて処理した他の部分を上記のとおり第2回エタノールスラリー化液に塩酸を加えて処理した。酸は塩化水素を化學量論量の約85%含む水不溶性イオン化性コラーゲン部分塩酸塩を生成するに十分な量であつた。

処理した塊を約60℃、圧力約233KPa(175mm

トレイに移したスラリー量は生成物の望む厚さおよび基準重量(9/㎡)によつてきめた。凍結乾燥はレップ凍結乾燥機、40型で行なつた。物体を入れたトレイを約-40℃の乾燥たな上においた。スラリーを凍結させるに厚さと基準重量によつて約1乃至約1.5時間を受けた。次いで真空にしたなを加熱して温度を38-40℃に上昇し絶対圧を約6.7cPa(50ミクロンHg)に下げた。凍結スラリーは厚さによるが乾燥に約24乃至約48時間を受けた。

上記のとおり製造した生成物は表1に示す様な種々の物理試験をした。ある製品は止血材料としての製品効果を例証するに適した外科的試験法にも使用した。

製品の基準重量と厚さはスラリーの固体含量および凍結乾燥トレイに入れたスラリー品質による。実施例6、8および10に示すとおり製品の厚さと基準重量はそれぞれ同一品質のスラリーが凍結乾燥トレイに加えられたとしてスラリーの

固体濃度によつて直接変る。

種々の製品の引張強さは2.54 cm/分のクロスヘッド速度、5.08 cm/分のチャート速度を用い、実施例9と11では0.5 kgの負荷範囲で、実施例12においては1 kgの負荷範囲でまた実施例6と7では2 kgの負荷範囲で標準インストロンTM1123型引張試験器で測定した。引張強さ測定には各実施例の試料は巾12.7 mmに切つた。試験はパルプ紙工業技術協会(TAPPI)試験法T414に65によつて行なつた。表1に報告した結果は12.7 mm片に対するグラムで表わした平均破壊荷重である。

試料の多孔率は水銀浸入多孔率計、特にアミンコウインスロー水銀多孔率計、型式5-7121Aを使用して測定した。この形の装置はある大きさの孔に侵入する水銀容積は与えた圧力に直接比例するという原理を利用している。既知重量の試料を補正した管に入れ系を真空にした後水銀

どさせた。水平面と試料ののびた端の間の角度を測定して巻きののびた量を調べた。この角度(度で表示)を強靱係数として表1に示している。

この強靱係数は生地の外形に順応し易さの表示である。この係数の小さい程より容易に外形順応に使用できる。この係数は約30乃至約80に大きく変るが、35乃至65が好ましい。

生地試料0.50 gを正確に秤量し7インチ×7インチ(17.75 cm×17.75 cm)の粗木棉布上に試料を置いて生地の保水能力を調べた。粗木棉布の三隅を集めて“バスケット”状に止めた。このバスケットを鉗子を使つて蒸留水に漬け水中に60秒間浸しておいた。次いでバスケットを引上げ振らずに60秒間過剰の水をおとした。バスケットと中の生地を直ちに秤量した。同様の方法を用いて同様の粗木棉布と止め金の保水能力を調べた。測定重量が

特開昭57-29359(6)

を測定す。系の圧力を漸次3.45 MPa(5000 psi)

迄あげる。種々の圧力における孔に侵入した水銀容積読みを記録する。圧力-容積関係を曲線としそれから孔直径および侵入結果を直接読みとることができる。試験は実質的に孔の全部が直径15ミクロン以下であることを示した。表1に示した結果は孔の75%が記載の値より小さな直径をもつことを表わしている。

生地試料をガラス円筒上に室温(22℃)、相対湿度約50%において24時間巻いておいた後試料をはなしその自重で偏平になることをもつて生地の強靱性を調べた。試料を1.9 cm×7.9 cm片に切断し直径2.54 cmのガラス管に巻きつけスコッチテープでとめた。24時間終了時点試料の中央部を水平面に接触させて管を水平においた。管の上で試料両端を共にとめているテープを切り、自由になつた生地端をガラス管からはなし、その自重のもとで巻きをも

ら生地の保水能力を計算し生地グラム当りの水グラム数として表1に報告している。

スラリとする液、水又は水とエタノールの混合液の性質は生地性質に測定できる影響をもたない。明らかにエタノールを省くことによつて腐蝕取扱い上おこる危険をさけ経費を減少する。

スラリ中の繊維濃度は生地特性に最大の影響をもつ。実施例1、2および3に示されるとおり、4%繊維を含むスラリから生成した生地は粗く硬くまた板状で不適当である。止血性と接着性は共にわるくまた生地は硬いため凸凹の傷口に順応しない。0.5%程度の少量の繊維を含むスラリはよい生地を生成する。低濃度スラリからの生成物生成には少なくとも2.5 mmの厚さの生地生成に十分な量をトレイに使用する。この低固体スラリ使用には厚さ対基準重量のバランスが必要である。実施例8と10に示すとおり厚さが約

2.5mm以下で基準重量が約50g/m²以下の場合生成物はうすく、むしろもろくまた“べたつく”手触りを示す。

4%固体スラリーから製造した実施例2と3によつてまた0.5%固体スラリーから製造した実施例11によつて示しており、生地は5.1mm厚さをもつていた。実施例2と3の生地は粗く硬くまた板状であつたが、実施例11の生地は柔かであつたが幾分もろかつた。実施例2と3の生地は基準重量280g/m²をもつていたが、実施例11の生地は基準重量80g/m²であつた。実施例2と3の生地は止血-接着性生地として不適当であつたが実施例11の生地は良好である。

本発明の目的に適合する生地は約0.5乃至約3.5%、好ましくは0.5乃至2.5%の固体含量、約50乃至約250g/m²、好ましくは80乃至200g/m²の基準重量および約2.0乃至約1.0mm、好ましくは2.5乃至7mmの厚さを

および小片の傷口に対する順応性を含む。はがす際の性質には傷口をおおう生地部分の付着をそこなわずに生地の過剰のへり部分を除去できる能力を含む。実際には傷のまわりに数ミリメートルを余しておおう様な大きさの小片をシートから切断する。止血後過剰部分、即ち傷のまわりの物質は除去し傷をおおう部分のみ残す様にはがすのがよい。

“生体における”外科的方法を麻酔した雑種犬について行なつた。犬の脾臓を出し切除傷をつくり、傷は約20×10mmで深さ約1乃至2mmであつた。上記のとおり試料生地から小片を切つたが、それは傷のまわりに約4-5mm余る大きさであつた。研究は試料の履歴を知ることなく符号付き生地試料を与えられたので評価はすべて“目隠し”であつた。

傷は自然出血の傷とする様乾燥外科用綿ガーゼパッドでぬぐい直ちに傷の上に試料をあてた。乾燥綿ガーゼパッド

もつスラリーから製造できる。

本発明の製品の非常に顕著な特性はその物理的性質と外観にある。従来の凍結乾燥製品は幾分粗い不規則な斑点ある表面をもつスポンジ状物体に似ているが、本発明の製品はやわらかく規則正しくまた白色のベルベットに似た表面をもつ。本製品は柔軟で通常の鉛筆に巻いても破れない。

実施例で製造したある製品を齧血動物の切れた生物学的表面の止血-接着材料としての血で湿つた場合の生地の効力のみでなくまた取扱の上およびはがす際の性質を評価するため設定した外科的試験方法に使用した。切れた生物学的表面には治療又は接合が必要であろう齧血動物の組織、軟骨、血管、骨および他の通常部分がある。

外科的方法には取扱の上の性質およびはがす際の性質が注目された。取扱の上の性質には粘着力、強さ、柔軟性、強靱性、鉄でシートをきれいに切断して小片にできる能力

で圧力をかけて試料を押えた。圧力を2分間かけした後ガーゼパッドをあげて血が止つたかどうか調べた。

試料を傷口に20乃至25分間おいた後のはがしてみた。この検査は試料の余つた端を鉗子ではさみ自由端を持ち上げて過剰物質を除去するのである。傷表面に対する物質の付着および再出血を防ぎ傷をふさぐに必要な物質の過剰部分除去のたやすさが認められた。

研究担当者の生地評価を表Ⅱに示している。表Ⅱでわかるとおり、見本試料は実施例6、9、10および12で製造したとおりの生地から切りとつた。実施例6の生地からの試料は実施例6Bと同じだが、空気オーブンで110℃で2時間加熱後126℃で20時間加熱して殺菌後試験した。担当者は試験した全試料が止血効力、接着性および取扱特性の点で良好(8)と報告した。実施例6、10および12の試料の引はがし特性は良好であつた。実施例9と

6 B の試料は傷に付着部分のはしをもち上げずに試料の過剰部分を除去することがむづかしくはしが上つた。合傷が出血するのでこれらの試料は不適当 (U) と報告された。この部分に再び圧力をかければ止血できる。除去されない生地量は極く僅かなのでこれらの試料も実施例 6、10 および 12 と共に全体として良好 (S) と判断された。

本発明の生地を傷にあて血で濡れた場合それは止血物体を形成する、即ちそれ自体傷組織に付着し傷をふさぐ。生地を傷口にあてた場合止血に十分な時間押えるだけでよく、その後で圧力を除くことができる。

本発明の製品は止血 - 接着性をもつ繊維約 0.5 乃至約 3.5 重量 %、好ましくは 0.5 乃至 2.5 重量 % を含む水性スラリーから製造しスラリーを凍結乾燥する。繊維はコラーゲン又は理論化学量的結合炭素含量の約 50 乃至約 90 %、好ましくは 60 乃至 85 % の結合炭素含量をもつコラーゲンのイ

水約 20 乃至約 35 %、好ましくは 22 乃至 32 % の保水能力をもつ。

特開昭 57-29359 (8)

オン化性水 - 不溶性部分塩より成る。

本製品は軟らかな規則正しい白色ペルベント膜表面をもつ繊維状であり生地が割れたり裂けたりすることなく直径 0.25 インチ (6 mm) の棒のまわりに巻くことができる様十分曲げやすく柔軟性である。厚さは約 2 mm から約 10 mm まで変つてもよいが 2.5 乃至 7 mm が好ましい。基準重量は約 25 乃至約 250 g/m²、好ましくは 80 乃至 200 g/m² でよい。12.7 mm 巾の引張強さは約 20 乃至約 900 g、好ましくは 30 乃至 450 g である。繊維状生地の構造は実質的にすべての孔直径が約 15 ミクロンを超えずまた孔の 75 % が約 10 - 11 ミクロンを超えない孔直径をもつ様なものである。生地は約 50 乃至約 85、好ましくは 55 乃至 75 の強靱係数をもつ。コラーゲン繊維より成る生地は生地グラム当り約 5 乃至約 10 g の保水能力をもつが、コラーゲンの部分塩より成る生地は生地グラム当り

表 I

実 施 例	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
固体、%	4	4	4	3	2.5	2	2	1	1	0.5	0.5	2
スラリー液体	W	W/E*	W/E**	W	W	W	W	W	W	W	W	W
厚さ、mm	7.6	5.1	5.1	3.8	3.8	4.5	10.2	2.5	6.8	1.3	5.1	6.4
基準重量、g/m ²	525	280	280	120	115	105	230	50	115	25	80	185
引張強さ、g/1.27mm				181	149	429	894		706		302	224
多孔率、75%が右のミクロン以下				996	998	726	1110		1030		1020	920
弾性係数				80	79	52	61		63		38	61
保水能力、gH ₂ O/g試料				239	314	272	247		264		266	72
特性	H	H	H	V	V	V	V	VT	VS	VT	VSP	V

W - 蒸留水

* 90%水/10%エタノール

** 88%水/20%エタノール

H - 粗く、硬く、板状

V - ベルベット様、柔らか、柔軟性、強い、

VS - ベルベット様、柔らか、柔軟性、

VSP - ベルベット様、柔らか、もろい、

VT - ベルベット様、うすい、もろい、べとつく。

手 続 補 正 書 (方式)

昭和56年7月6日

特許庁長官 島 田 春 樹 殿

1. 事件の表示

昭和56年特許願第87022号

2. 発明の名称

繊維性コラーゲン質止血-接着性生地

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

名称 アビコン インコーポレーテッド

4. 代理人

150

住所 東京都渋谷区桜ヶ丘24番8号
テサンマンション新南平台(電話476-2571)

氏名 弁理士 (6323) 川 瀬 良 治

5. 補正の対象

願書に添付の明細書

6. 補正の内容

別紙のとおり手書き明細書をタイプ簿籍に補正した。
ただし、内容の補正はない。 特許庁

表 II

実施例	止血効力	接着性	取扱性	引はがし性	総合
6	S	S	S	S	S
6B	S	S	S	U	S
9	S	S	S	U	S
10	S	S	S	S	S
12	S	S	S	S	S

S - 良好

U - 不適當